

パンデミックを乗り越えて

巻 頭 言

今年もまた“新型コロナウイルス”に触れずに巻頭言を進めることはできないが、2年以上に及ぶこの感染症との対峙・闘いを体験して、ようやく冷静に対処できるようになったように思える。未だに感染者の数は多く、マスクをはじめ感染防止のための数々の規制の中にあるものの、これから先、新しい生活様式といわれるところへ人の意識は向かい始めている。コロナによって失ったものは時間をはじめとして数知れないが、一方またコロナが投げかけた人社会に関する価値と意味を今後に生かすことこそ人類に与えられた課題であろう。人の交流・集合が厳しく制限された中で、デジタル革命は急速に進みコミュニケーションの取り方が一変した。当初、違和感を持って始まっていたことが十分に対面コミュニケーションと同等であることが解り、気が付くとそれまでの移動に要していた時間や燃料や電力の節減にも繋がって、直前あれほど声高に叫ばれていたSDGsの推進にもつながっている。コロナは究極のところ人類・地球の延命に寄与しているのではないかとも考えられるのだ。

しかしながら一方では、国際交流の遮断や情報の管理によって国家的な強権感染防止対策が行われ、その一時的成功に酔った一部強権政治の国においては独裁者の出現や恐怖政治の蔓延が見られる。文明の進化、情報手段の発達、それらは一方的に人を豊かにし、前進させるものではなく、歴史を繰り返そうとする人間の手によって逆行の手段ともなってしまうのだ。これらはコロナに責任を負わせることの出来ない人の歴史の繰り返しであり、これもまたコロナが与えた教訓にも思える。

振り返って我が日産厚生会とコロナの関わりとその結果を検証してみると、未知の感染症との対峙から始まったあの恐怖と不安、それでも医療者として自らの感染対策を取りつつも患者の治療・介護・介護に携らざるを得なかった覚悟、そして徐々に築き上げ、自信を獲得し芽生えてきたコロナ感染予防と対策によって光が当たった医療者のプライド、非常に大変だったけれど、充実していた濃厚な時間であったとも言える。この経験は皆さんにとってやはり大きな財産になったと考えている。そして、そのなかで経験し考察してきたことは図らずも医学研究の対象であり求めるテーマを提供してくれた。残念ながら2年続けてのWEB開催となった医学フォーラムだが、その演題にはっきりと表れている。禍を転じて福となす、逞しく困難を乗り越える日産厚生会の姿を見ることができる。2021年の本業績集には以上のような時代の変化と公益財団法人日産厚生会の活動がドキュメンタリーの如く盛り込まれている見事な記録である。



日産厚生会理事長
中嶋 昭